商業部会

研究主題　「授業改善に生かす評価と指導の在り方」

Ⅰ　主題設定の理由

教育課程審議会の答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」（平成 12 年 12 月）では、(1)「生きる力」をはぐくむこと、(2) 目標に準拠した評価の重視（個人内評価を工夫すること）、(3) 指導と評価の一体化・評価方法の工夫・学校全体の取り組みとすることの３点を基に、評価の基本的な考え方を示した。これを基に「東京の教育２１」研究開発委員会では、平成 13 年度には「評価」に主眼を置き、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の各観点に基づく評価規準を作成するなど評価の在り方について研究開発を行った。また、平成 14 年度にはその評価規準を活用するとともに評価方法と指導の手立てについて「ビジネス基礎」を中心に研究開発を行った。

今年度は、新学習指導要領の実施を踏まえ、「授業改善に生かす評価と指導の在り方」として、平成 14 年度に取り上げた「ビジネス基礎」からさらに広げ、「簿記」「情報処理」「課題研究」（商業技術・ＣＭ作成）を中心に、各科目の中で育てたい学力について研究し、学力を身につけさせるための指導法とともに評価結果を活用して学習の到達度と授業における指導法の改善について研究した。

また、研究授業を通して、それぞれの科目についての学力を実証し、実際に評価の観点に基づいて生徒を評価することによって、学習の到達度から今後の授業の学習内容や学習の方向性、指導法の改善について検討した。

Ⅱ　研究概要

今年度の商業部会では、昨年度の「ビジネス基礎」に加え、商業教育の基礎的・基本的科目である「簿記」「情報処理」について、また、問題解決能力や自発的、創造的な学習態度を育成する課題研究の中から、作品制作分野の「商業技術」「ＣＭ作成」を取り上げ、それぞれの「育てたい学力とは何か」について研究し、学力を身につけさせるための具体的な指導法を研究した。なお、「簿記」については、授業等の関係から実際の授業研究は「工業簿記」で行うことにした。

学習の到達度については、「年間指導計画の作成→評価規準に基づく評価項目の作成→研究授業による評価の実証→授業評価→授業改善」という一連の流れの中で、評価規準に基づく評価を通して学習の到達度を把握するとともに、教員の自己評価だけでなく、生徒による授業評価（生徒自身の授業参加への自己評価を含む）も活用しながら、分かる授業の改善に資する指導法の研究を進めた。

研究の成果を実証するために、５つの科目すべてについて研究授業を行い、検討を重ねた評価項目により評価を行った。その過程で、それぞれの科目の目標や指導形態の違い、さらに生徒の到達目標設定の違いなどがあり、評価方法や評価観点の選択・配分の違いが明らかになるとともに、評価規準および評価項目の作成上の課題や工夫が明らかになった。本研究では、それらを改善・精査することにより日々行われている授業に即した具体的な評価方法の検討、評価規準・評価項目の作成、指導法の改善を目指した。

以下の章では、それぞれの科目で実施した研究授業における評価規準・評価項目・重点評価観点・評価及の実施と分析を中心に考察を進めていくことにする。

なお、評価項目の表に使われている記号は、重点的に評価すべき観点を◎で示し、付加的に評価できるものを○で示した。

Ⅲ　各科目における研究成果

1　研究授業報告－「ビジネス基礎」

(1)　**研究授業実施校**　A商業高等学校　第1学年
(2)　**研究授業実施科目**　「ビジネス基礎」　2単位
(3)　**授業単元**　売買に関する計算（5時間目／14時間）
(4)　**単元の目標**　・ビジネス基礎における計算事務分野の基礎知識を習得させる。
(5)　**単元の求める学力**　・計算用具（電卓・そろばん）の使用方法について理解している。
・伝票集計のような実務的な計算についても触れ、社会に出てからも役に立つ技術を身に付けている。
・ビジネス計算などのビジネスに関する特別な問題も理解し、自ら解答できる。（全商珠算・電卓実務検定3級程度）

(6)　単元の評定規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
売買取引を行う上で、数の表示方法と売買に関する各種の計算に関心を持ち、自ら進んで計算したり、確認しようとする。	売買に関する各種の計算について、適切な処理ができ正しい解答を導き出す判断ができる。	数の表示方法と売買計算に関する基礎的な知識と技術を身に付け、売買に関する各種の計算を的確に処理できる。	売買に関する各種の計算に対する基本的な計算式や方法を理解している。

(7)　評価項目の選択と配分

内　容	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
計算用具の操作	○		◎	
売買に関する計算		◎		○
課題提出	◎			○

(8)　本時の重点評価観点

内　容	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
導　入 （計算練習）	○		◎	
展　開 （仕入原価と売価）		◎		
まとめ （確認テスト）	○			◎

(9)　評価の実施と分析について

本時においては、授業に対する意欲を高めるため、授業の導入時にて構成比率を含めた簡単な計算問題を実施し、以下の結果を得た。

計算練習（5分）　正答率　61.3%　構成比率解答率　6.5%（1学期中に説明済み）

すべてが解答でき、正解した生徒は1名のみであった。このことから、以前に説明した構成比率の解答方法についても、「継続的に指導していかないと、生徒たちが積極的に取り組むことができない。」ということが分かった。

次に、授業の展開時に思考・判断の観点からプリントを活用して、原価・定価・売価の関係及びそれぞれを計算するための公式などを説明し、実際に例題を解答させた。そして、授業のまとめ時に正しい公式を選択し計算ができるかを確認するためのテストを実施した。

10分間で行う確認テストの問題は、①代価、②仕入原価、③定価、④定価、⑤売価の計算の５つの設問で構成されており、公式に数値を当てはめただけでは、計算できない問題も載せてみた。

それぞれの問題の正答率は、①22.8%、②28.6%、③54.3%、④45.7%、⑤57.1%であり、誤答の例としては、次のようなものがあった。

1．１５ｋｇにつき¥４，５００の商品を、２９０ｋｇ販売した。代価はいくらか。

式) 290÷15=19　4,500×19=85,500　答. ¥85,500　Ⓐ

$4{,}500 \times \frac{290}{15} = 85{,}500$　答. ¥85,500　Ⓑ

$290 \times \frac{4500}{15}$　答. ¥87,000円　Ⓒ

Ⓐ と Ⓑ の例のように式は合っているものの、電卓の小数点スイッチの設定ミスによる計算間違いの生徒が 28.6%もおり、「計算の途中で端数の生じるような問題に対しての対処ができない。」、「電卓で計算をしたことにより誤答に気付かない。」などの生徒が多数いることが分かった。さらに、Ⓒの例のように習った公式を用いずに違う計算方法で解答を導き出した生徒もわずかではあるがいることが分かった。

また、白紙答案の生徒のコメントには下記のような意見を記入されていた。授業内容は概ね理解できたが、すぐに応用できない生徒がわずかながらおり、繰り返し反復練習させることの必要性を再認識できた。

評　価　票

	評　価　項　目	自己評価
1	全体的に授業の説明を聞いて取り組むことができた	A　(B)　C
2	課題を最後まで仕上げることができた	A　(B)　C
3	本日の自己採点（意欲・理解度）をしてください	A　(B)　C

自分で話は聞いてるつもりなんだけど理解できない。

授業中はなんとなくわかったけど、式とかまだ覚えてないからわからない。

なお、評価票のそれぞれの結果を集計してみると、

1．	A	65.6%	B	31.3%	C	3.1%
2．	A	51.3%	B	37.5%	C	9.4%
3．	A	50.0%	B	40.6%	C	9.4%

となっており、必ずしもテストの結果と自己評価が一致しないことが分かった。評価については、自分自身に甘い生徒、厳しい生徒の両者が存在することも分かった。また、この評価票３の項目の評価からは、生徒自らの授業評価として確認でき、教師側の授業改善へのヒントをつかむことにもなった。

さらに、知識・理解の観点からは、やはり、教師一方向での授業では、「生徒たちが理解しているのか。」という確認がしづらい状況ではあるが、評価票やテストの実施を毎時間取り入れることにより、生徒の意見が教員に届き、教員自らの授業改善につながるための大きな道標になるのではないかと思われる。

2　研究授業報告 ―「 簿 記 」

(1)　**研究授業実施校**　B商業高等学校　第２学年

(2)　**研究授業実施科目**　「工業簿記」　３単位

(3)　**授業単元**　個別原価計算（２時間目／11 時間）
「製造間接費の実際配賦」（１時間目／３時間）

(4)　**単元の目標**
・個別原価計算における製造間接費の配賦の重要性を理解させる。
・製造間接費の実際配賦の意義を理解させる。
・実際配賦額の計算方法について理解させる。

(5)　**単元の求める学力**
・製造間接費の配賦の重要性について理解している。
・金額の按分ができる。(配賦率の計算と配賦額の計算)
・「電卓をたたく」、「そろばんをはじく」など自分でやってみることができる。

(6)　**単元の評価規準**

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
製造間接費の意味、配賦率・配賦額の計算を、自ら進んで理解しようとする。 練習問題に積極的に取り組んでいる。	金額の按分の仕方と配賦の意味を考えている。 配賦率の算出の意味を考えることができる。	自らの考えをまとめることができる。 正しい計算式をたてることができる。	配賦率の計算と配賦額の計算を理解している。 製造間接費の実際配賦の計算方法を理解している。

(7)　**評価項目の選択と配分（各授業）**

	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
導　入	◎			○
展　開	◎	○		◎
まとめ	◎		○	◎

本単元は 11 時間の構成であり、内容は①原価元帳と原価計算表、②製造間接費の実際配賦、③製造間接費の予定配賦、④作業くずと仕損じ、⑤部門別計算（部門費配分表→部門費振替表）、⑥製造部門費の予定配賦である。簿記の学習では、この 11 時間を「導入→展開→まとめ」に分けることは難しく、前時までの授業の理解に立ったうえで、毎回の授業で学習する内容を重ねていくことになる。そのため、毎回の重点項目は同じ内容になってしまうことが課題である。

また、各授業時間での重点項目は、関心・意欲・態度を前提とした知識・理解である。簿記の授業に関心を示し、意欲を持って前向きな態度で取り組むことが知識・理解につながっていく。付加的に発言を求め、思考・判断、技能・表現を見ることも可能ではある。しかし、発言内容はそれ以前の授業の知識・理解の内容であることが多く、課題の解答内容も個性的な解答ではなく、知識・理解に基づいた画一的な正答を求めることが多い。そのため、発問について思考・判断を求める工夫が必要である。例えば、条件だけを提示し、どの方法を選択して計算したかなど、思考・判断に基づく解答を導き出すための発問等の工夫が課題である。

(8)　**本時の重点評価観点**

本時の授業内容は、製造間接費の実際配賦における「配賦率の算定」と「配賦額の算定」の２点がポイントであり、金額の按分ができるかどうかが重要である。評価の観点としては、関心・意欲・態度を前提とした知識・理解が中心となる。学習の到達度を確認するための評価は、授業時の様子や提出プリントを活用することにより行うことができた。また、配賦を学習する前に次のような簡単な例示で金額の按分を行い、答えさせることで思考・判断を評価することができた。

〈例題〉　¥100 をＡ・Ｂに合理的に配分するには、いくらずつ分ければよいか。

¥100 ｛ → Ａ ¥
　　 → Ｂ ¥

① 特に条件がない場合
② Ａでは２人、Ｂでは３人の労働者がいる場合
③ Ａでは¥30、Ｂでは¥20 の材料を使っている場合
④ Ａでは１２時間、Ｂでは８時間働いている場合

実際の配賦の方法を学習する前であったので、自由な発想のもとで金額の按分に対する生徒の思考・判断を評価することができた。

また、生徒の自己評価として授業で使うプリントの最後には、次のことを記入させた。

まとめ
1．今日の授業は理解できましたか。(はい・どちらともいえない・いいえ)
2．理解しようとして前向きに取り組めましたか。(はい・どちらともいえない・いいえ)
3．その他なにかあれば記入してください。

生徒の評価結果については、教務手帳には、はい「1」、どちらともいえない「2」、いいえ「3」として、1、2の質問について、例えば「11」「21」「22」と記入した。また、3のコメントがあれば内容をメモするようにした。

(9)　評価の実施と分析について

生徒は、自己評価を素直に記入している。授業の様子及びプリント等の提出物からみた①関心・意欲・態度、②知識・理解とほぼ一致している。簿記の学習において中心的な評価項目であるから、この２点に絞った評価を実施した。この２点は、簿記では比較的評価しやすい内容である。平常の授業の他、定期考査、小テスト、課題、補習、いろいろな場面で確認できる内容である。しかし、反対に思考・判断及び、技能・表現の２点については、仕訳や記帳の正確さが要求される簿記において、これまでほとんど検討されていなかった視点であり、簿記の授業では評価方法が難しいと考えられる観点である。

この思考・判断及び、技能・表現の２点をどのように見ていくかが、今後の簿記分野での課題である。研究授業では、生徒への発問等を通してこの２点を見ることはできたものの、全体の中の一部の生徒でしかない。すべての生徒の評価をするための工夫が必要である。

簿記では検定試験という一つの目標があるため、すべての授業で取り入れるという訳にはいかないが、思考・判断、技能・表現の２点を取り入れる授業を工夫していく必要がある。例えば、製品の原価計算をさせるときに、「製造間接費は予定配賦するのか」、「実際配賦するのか」、また、「直接材料費法なのか」、「直接作業時間法なのか」などの判断させるなど、いろいろな資料を例示しながら生徒に考えさせ、どのように計算するのかを自分で判断して、生徒からいろいろな製造原価・解答がでるような課題を与えることが考えられる。あるいは、配賦の方法も既存のものではない新しい発想のものが出てくるかもしれない。製造原価の算出には、関心・意欲・態度は必要であるし、各種方法の知識・理解の上に立ち、「どのように・・」という思考・判断に基づく解答が求められる。生徒が正しく解答を導くためには何が必要なのかを考えることにより、見やすく分かりやすい帳票づくりのための技能・表現につながるものと考える。簿記において、思考・判断を求めるのは、「考えさせる」という重要な要素があり、「考えさせる」授業は本来のあるべき授業の姿である。資格取得とともに「考えさせる」授業の展開を工夫していくことも大切である。そして、思考・判断及び、技能・表現を見ていくための工夫が、新学習指導要領において求められている会計リテラシーの育成にもつながるものと考える。

3　研究授業報告－「 情 報 処 理 」

(1)　**研究授業実施校**　　C商業高等学校　第１学年

(2)　**研究授業実施科目**　「情報処理」　３単位

(3)　**授業単元**　　データベース関数の利用（２時間目／５時間）

(4)　**単元の目標**　　表計算ソフトのデータベース関数を使って、データ処理を行う。

(5)　**単元の求める学力**
- 課題に対して、すでに学習した操作方法および知識をもとに自分で解決できる。
- 課題の意味を理解し、適切に処理する方法を自ら考え判断しようとしている。
- 課題に対するデータベース関数を用いた集計処理について、正しく理解している。
- 表のデータを、目的に応じた形式に、分かりやすくグラフを用いて表現できる。

(6)　**単元の評価規準**

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
データベース関数について関心をもち、能率的に処理することを自分で考え、進んで取り組もうとしている。	例題に対して、自ら処理できる条件を考え、基礎的な技術を用いて、合理的な処理を行うことができる。	表の形式および体裁を見やすいように設定し、データをもとにして、適切なグラフを作成できる。	データベース関数の基本的な知識を身に付け、操作方法を理解している。

(7)　**評価項目の選択と配分**

内　　容	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
取組状況・関心度	◎			
データベース関数の理解	○	○		◎
課題提出			○	◎

(8)　**本時の重点評価観点**

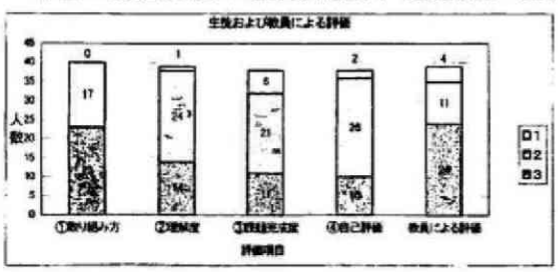
	指　導　項　目	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
導　入	本時の授業内容の説明	◎			
展　開	例題実習の処理条件に従って、作業させる。（復習）	○	◎		
	データベース関数の利用	○			◎
	グラフの作成	○		◎	
	本時の単元についての確認問題	○			◎
まとめ	自分自身の評価	◎			○

(9)　**評価の実施と分析について**

ア　観点別評価の実施と課題

教員が約40人の生徒を毎時間の授業で４観点を評価していくことは、大変難しいことである。しかし、正しい解答か、正しくない解答かという視点だけで生徒に課した課題の結果から評価するのではなく、結果を導く過程でどのように考えたのか、また、表現方法などを評価に結びつけていくことが大切である。評価については、教員側だけでは十分にすべてを把握することは難しい。そこで、生徒による自己評価票を参考にすることで、全体的な評価をすることができた。

今回の実習問題の取組状況を、教員側から評価した結果は、次の通りである。



評価の仕方

“３”：課題をすべて処理した。

“２”：本時の単元について処理できている。

“１”：本時の単元について理解できず、処理できていない。

結果から、「本時の単元」（データベース関数）の処理について、約９割近い生徒がほぼ理解できていると考えることができる（「知識・理解」）。しかし、今まで学習してきたことが、実習に活用できているかという視点（「思考・判断」「技能・表現」）から考えると、約６割程度の達成状況である。

情報処理の授業では、データに対してどのように行えば効率的に処理できるのかを考えさせ、試行錯誤せることにより技術が身に付くことが改めて確認できた。

イ　生徒による自己評価の分析

実習問題として、以下の処理条件にしたがって、表とグラフを完成させる課題に取り組ませ、生徒による自己評価を行った。なお、紙面の都合上、問題の表は省略する。

処理条件
1．週間売上実績表の「商品名」を適当な関数を用いて表示する。
2．週間売上実績表の「売上金額」を式を用いて求め、単価のフィールドとともに３桁ごとにコンマを付けて表示する。
3．販売員別集計表の「売上金額合計」・「売上数量平均」は、該当する販売員の「売上金額」・「数量」をもとにデータベース関数を利用して求める。
4．各表の体裁は、各自が見やすいように設定する。
5．販売員別の「売上金額合計」をもとにして、グラフを作成しなさい。

＜生徒による自己評価票～例～＞

評　価　票

科目名　情報処理

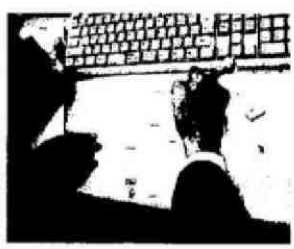
授業内容　データベース関数

授業日　平成１５年　月　日（　曜日　限）

年　組　番氏名

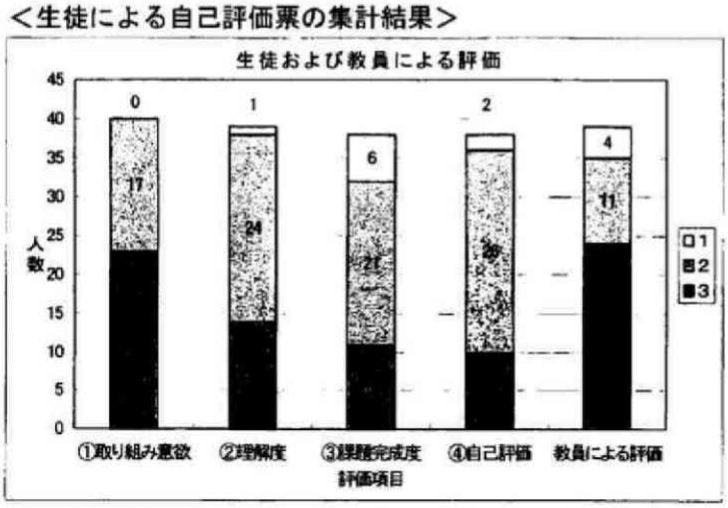
	評価項目	自己評価
1	全体的に説明をよく聞いて取り組むことができた。	３・２・１
2	データベース関数の操作について理解でき、処理することができた。	３・２・１
3	処理条件にしたがって、最後まで問題を終わらすことができた。	できた・できない
	できなかった人のみ以下、記入する	
	① 処理条件１の処理について	できた・できない
	～　一　部　省　略　～	
	⑤ 処理条件５の処理について	できた・できない
4	本日の自己採点（意欲、理解度を含め）をしてください。	３・２・１

○各自、「自己評価」欄の"１（悪い）・２（普通）・３（良い）"うち、１つ○印を付けなさい。



＜下写真：評価票の記入＞

＜生徒による自己評価票の集計結果＞



※上記グラフの見方（①～④の項目　生徒による自己評価）

教員が一律に評価することが難しい意欲・関心・態度について、自己評価票をもとにまとめた。その結果、教員による評価と意欲・関心・態度の評価項目とがほぼ一致していることが分かった。

こうした評価結果から、過去に学んだ関数等についても反復的に学習させる必要があることが分かった。今後も教員による評価と生徒の自己評価の相関関係を見ながら、評価の方法について一層工夫していきたい。

4　研究授業報告ー「課題研究１」

(1)　研究授業実施校　D商業高等学校　第３学年

(2)　研究授業実施科目　「商業技術」（商業デザイン）　２単位

(3)　授業単元　広告の作成（５時間目／６時間）

(4)　単元の目標
- 効果的な広告を作成する
- 作成した広告を発表する
- 他の生徒の広告を評価する

(5)　単元の求める学力
- 企業活動における広告の意義や目的の理解している。
- 広告作成のための効果的な表現能力を身に付けている。
- 他の生徒を評価する思考力を身に付けている。
- ワープロソフト操作の基礎知識（文字飾り・図表の挿入・印刷）を身に付けている。

(6)　単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
広告の目的や意義について関心を持ち、広告の作成に意欲的に取り込むことができる。	課題としている題材を研究し、その目的に応じた広告を作成できる。	コンピュータを活用し、効果的な広告にするための工夫ができる。	広告の目的や意義を理解している。 コンピュータを活用し、効果的な色彩表現ができる。

(7)　評価項目の選択と配分

内　容	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
広告の基礎	◎			○
素材調べ	◎			○
作品制作	○		◎	
発表準備		◎	○	
発表・他者評価		◎		○

本単元全体としては、作品制作が中心であり技能・表現の観点が重点となるが、完成した作品に対する自己評価と他者評価を組み合わせることにより各自の思考・判断の観点も評価する。

(8)　本時の重点評価観点

本時は単元の中で展開の最後の部分であるので、特に作品制作への取り組みと効果的な広告となるための工夫がなされているのかを重点的に評価していく。さらに、それぞれの「広告自己確認表」をもとに発表の準備を進め、ポイントが整理されているかを確認する。

(9)　評価の実施と分析について

ア　前時までの内容と評価の流れ

広告の意義や目的について説明し、広告の作品例などを参考に広告に関するイメージを持たせた。広告の効果に関する理解と広告に対する関心・意欲・態度の観点を重点的に評価を行った。また、色の工夫や文字の工夫などの方法を例示し、広告作成の前に文字や色のバリエーションについて学ばせた。

広告制作のためには、題材となる素材を十分に理解させる必要があり、インターネットなどを活用して「トマト」の特徴などを調べさせた。素材について積極的に調べる関心・意欲・態度の面を重点にして、さらに素材に関する知識・理解の面でも評価を行った。

広告の基礎的な知識と素材の特徴など調べた内容を基に、作品を制作させた。題材を十分に研究し、その題材をより効果的に表現するために表現方法を試行錯誤し、表現方法に工夫が見られることが評価の基準となる。また、単純な図表の挿入や文字の飾りだけにとどまらず、広告の効果を検討した上での表現が求められる。オリジナルの作品制作であるので、技能・表現の面を重点として評価を行った。

イ　本時の内容と評価

前時までに作品が完成していない生徒は、作品制作の続きに取り組ませた。完成した生徒には「広告自己確認表」（右表を参照）を配布し、ポイントや工夫した点などを考えさせた。さらに、工夫や強調が必要な部分について手直しをさせた。自分の作品を再点検させることにより思考・判断の面の評価を行った。また、他者に見られる広告であることを意識させ、作品に対して一層の工夫を促すことができた。

広告自己確認表

年　組　番 名前

ポイントの満足度　4満足　3やや満足　2やや不満　1不満

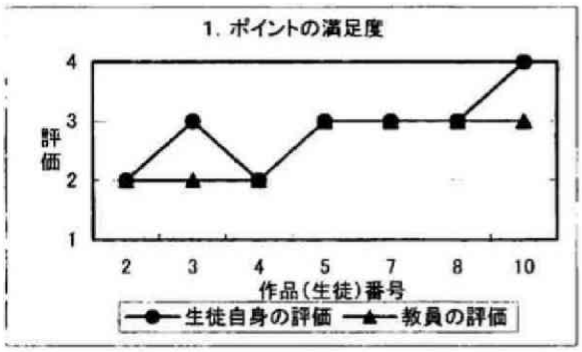
自分の作成した広告のポイント

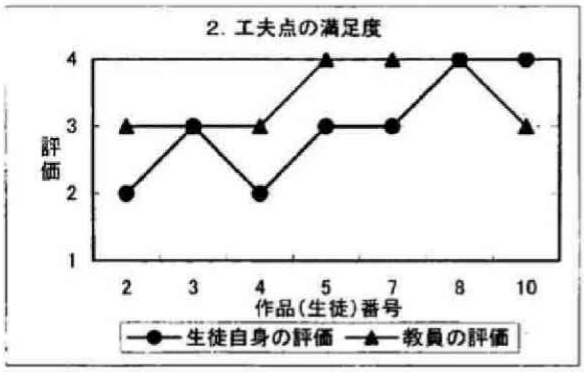
工夫点の満足度　4満足　3やや満足　2やや不満　1不満

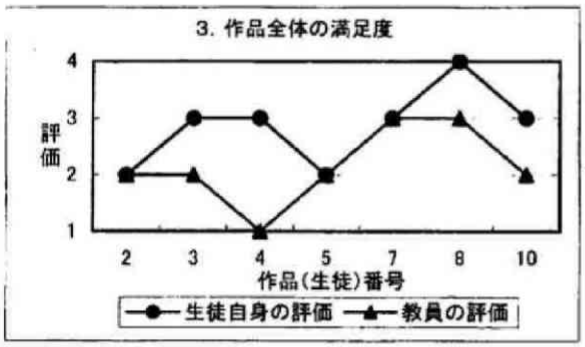
表現上の工夫点

作品全体の満足度　4満足　3やや満足　2やや不満　1不満

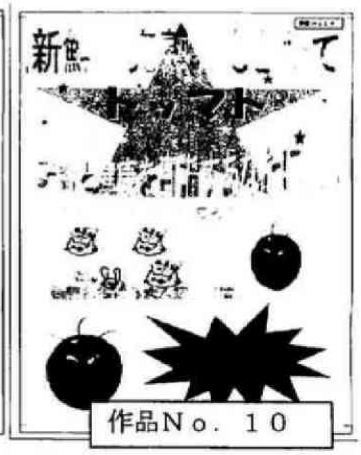
反省および改善点







作品Ｎｏ．８



作品Ｎｏ．１０

ウ　評価の分析と今後の課題

生徒自身の評価（満足度）と教員側の評価の比較を行ってみた。「１．ポイントの満足度」では、生徒と教員がほぼ同じ評価になった。「２．工夫点の満足度」では、生徒自身より教員側の評価のほうが高くなった。この評価の差は、生徒がやや控えめに自分自身の工夫を評価したことと、生徒のオリジナル性を教員側がより高く評価したためである。「３．作品全体の満足度」では、生徒自身より教員側の評価のほうが低くなった。この評価の差は、生徒側が工夫した点などを考えて評価しているのに対し、教員側はＰＯＰ広告としての効果や全体のバランスなどを考慮して、評価しているところにある。広告としての完成度としてはまだ物足りない部分もあると考えられる。上記の「作品番号８」と「作品番号１０」では、広告としての効果は「作品番号８」のほうが高い。「作品番号１０」はオリジナル性や工夫した点などは十分に評価できるが、価格の表現が小さいことや商品説明が多すぎるなどの点で、効果的な広告にはなっていない。今回生徒自身に評価させたことは、生徒の工夫を促す点で有効なものであった。また、生徒と教員の評価を比較することにより、評価に対する見方の違いが明らかになった。さらに、生徒が他の生徒を評価する他己評価も実施してみたが、友人関係などの理由で正直な評価ができないようであった。しかし、各自が作品の発表を行うことは、発表に備えて自分の作品を説明するための準備をすることで技能・表現の工夫を考えさせ、他の生徒の発表を聞くことで次の課題に対する関心・意欲を喚起することになった。

5　研究授業報告－「課題研究２」

(1)　**研究授業実施校**　Ｅ商業高等学校　第３学年

(2)　**研究授業実施科目**　課題研究「ＣＭ作成」　３単位

(3)　**授業単元**　ＣＭ企画（３時間目／６時間）

(4)　**単元の目標**
- 各自の企画商品をグループで検討し、作成するＣＭを企画する。
- 商品の特徴を理解するとともに、撮影方法や表現を工夫し、より効果的なＣＭを企画する。
- 企画したＣＭを分かりやすく発表する中で、資料作りや表現能力を養う。
- 撮影に必要な小道具等の準備を計画的に行う。

(5)　**単元の求める力**
- ＣＭを創り出す創造力を身に付ける。
- グループ内での協調性を身に付ける。
- 準備等に自ら取り組む姿勢と企画力を身に付ける。

(6)　**単元の評価規準**

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
ＣＭの目的や意義について関心を持ち、企画に意欲的に取り組むことができる。	商品の特徴等を理解し消費者にどう伝えるかを考え、工夫することができる。	企画した商品のＣＭをより効果的に表現し、撮影方法や表現を工夫した作品を作ることができる。	ＣＭ企画の手順や苦労を理解し、現在市場に出ているＣＭ作品の企画を分析することができる。

(7)　**評価項目の選択と配分**

内　　容	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
企画会議		◎		○
発表準備		◎	○	
＊発表会		○	◎	
撮影準備		◎		○

(8)　**本時の重点評価観点**

内　　容	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
発表評価の説明		○		◎
発表者（資料含む）		○	◎	
発表評価		◎	○	
質疑応答		○	◎	

(9)　**評価の実施と分析について**

ア　前時までの内容と評価の流れ

単元の流れとしては、まず過去の作品や撮影方法の技術・工夫を説明し、各グループでＣＭ作品の企画を作らせた。グループ別の会議の中では、企画に対する発言内容で思考・判断に対する評価を重点的に行った。発表会のための準備では、「伝える」ことをどう考えたか（工夫したか）で思考・判断の評価とした。

関心・意欲・態度の項目については、会議の中での発表者の決め方や、台本等の資料作りに積極的に関わったかどうかなど積極性や協調性を評価したが、この授業においては、どの単元でも関心・意欲・態度は大切な評価の観点なので、常時評価することを心がけている。特に、この授業のような作品制作分野については、関心・意欲・態度の評価にウエイトが高くなる傾向がある。意欲を持って取り組むことにより、ここはどうしたらよいのか、こうするためには何が必要かなどを考え、考えることにより知識・理解が深まり、さらに新しいことに気が付いていくという流れができる。ゆえに教員側からすれば、いかに関心・意欲・態度を高める授業を行うことができるかが非常に重要なポイントになってくる。動機付けをしっかりできるかどうかでその単元の達成度が評価できる。作品制作であるから、意欲の上に作品に対する思考や技能・表現能力が問われるが、評価としては、意欲・態度に重点が置かれる。

イ　本時の内容と評価

本時の内容としては、発表やそれに伴う資料、また発表に対する質疑応答により表現能力の評価と各班の発表を各自が評価する中での思考・判断の評価という２点のポイントがある。

発表者については明らかに評価できるが、その手助けをしている生徒の動きなどをしっかり見ていることが大切である。また、積極的に質問や意見を述べた者の評価も高くなる。発表会形式ではどうしても発表に関わる生徒の評価のみに偏る可能性があるので、今回は各班の発表を評価する評価表を各自に記入させることで、発表をしっかり聞く態度や、評価内容により思考・判断をチェックできるように工夫した。

課題研究　「CM作成」　　企　画　発　表　会　　審　査　基　準

審査基準　（各項目１０点×５項目＝５０点で審査する。）

① 企画内容・・・企画内容についての評価

（商品のコンセプトにあったものか／CM作品として独創性があるか／面白そうな作品であるか／伝わるものがあるか）

② 計画性・・・・計画がしっかり立てられているかの評価

（準備物がしっかりリストアップされているか／分担がしっかりできているか／日程的に無理がないか／出演者等の準備がされているか）

③ 撮影工夫・・・撮影方法が工夫されているかの評価

（独創的な撮影方法を考えているか／商品コンセプトににあった撮影方法であるか）

④ 発表態度・・・当日の発表に関する評価

（作品のコンセプトが理解できたか／内容が聞こえたか／内容が理解できたか／発表に工夫が見られたか／資料をうまく利用していたか）

⑤ 資　料・・・・当日配布された資料に関する評価

・わかりやすい資料であったか　・資料に工夫が見られたか

企画発表会　　審　査　用　紙　　3年　　組　　番

班

＜　採　点　＞

①	企画内容	（１０・８・６・４）	
②	計画性	（１０・８・６・４）	
③	撮影工夫	（１０・８・６・４）	
④	発表態度	（１０・８・６・４）	
⑤	資　料	（１０・８・６・４）	
	合　計		点

＜　感　想　＞

① 企画内容

② 計画性

③ 撮影工夫

④ 発表態度

⑤ 資　料

ウ　評価の分析と今後の課題

実際の生徒たちの評価結果を見ると、予想通り準備段階での意欲の評価の高かった班の発表が、発表態度や資料において評価が高く、審査用紙の記入については、よく分析して評価しているものが約３割、採点のみのものが約１割であった。発表会の反省・感想においては他の班の内容を知ることが出来て参考になったという意見が多く、発表が素晴らしかった班を基準として、自らの班の発表も分析しており、今後の発表会ではさらに工夫した内容が期待できるものであった。

今回、生徒を観点別に評価してそれをもとに評定を出したが、今までの方法によるものとほとんど変わりはなかった。これは、教師自身の生徒に対する評価を再確認する良い機会であったと思う。ただし、毎日の授業の中で観点別に生徒を評価し、それを点数化していくことは作業量的にも時間的にもかなり難しい課題があることもわかった。今後は、それぞれの授業でその学校の生徒に合わせた評価規準を作成し、評価を行うことが求められている。そのためには、教科科目ごとに共通した基準で評価するなど様々な工夫を考えることが必要である。

Ⅳ　まとめ

1　各科目における研究授業の考察

「ビジネス基礎」では、小テストによって生徒の知識・理解を測るなどの工夫をした。小テストやプリントなどで解答のみを求めるのではなく、式の立て方や思考の過程をはかれるものに工夫することにより、多面的な評価が可能になると思われる。

「工業簿記」では、従来からペーパーテストが評価の中心であり、４観点すべてを評価することは大変難しい科目である。その中で、授業のプリントを工夫し、練習問題を基本から応用まで幅広く揃え、生徒への発問とその答えや応用問題への取り組み姿勢、プリントの提出などによって、多面的に生徒を評価する手法をとった。また、プリントの最後には、授業内容に関する簡単な生徒への質問を盛り込むなどの工夫をした。

「情報処理」では、実習結果のみが課題として提出されるため、他の科目に比べて、生徒の思考の過程を把握し、評価することが困難である。そこで、データベース関数を使わずに、同じ結果を出すにはどうしたら良いのかを、生徒に考えさせるなどの工夫をした。

「課題研究」（商業技術）では、作品制作の過程から生徒の思考・判断や知識・理解を評価する必要がある。そのためには、完成までのプロセス（試行錯誤や工夫など）を一人一人について見ていかなければならない。観点に基づいて評価を十分に行うためには、評価を行う生徒数は考慮する必要がある。

「課題研究」（ＣＭ作成）では、グループに分かれての作品制作であったため、生徒のグループ内での役割も踏まえて評価しなければならなかった。個々の生徒を役割別に評価していくことは大変困難なことであり、生徒を観察する優れた目が要求される内容であった。また、作品制作は長い時間を要するだけに、単元のトータルとして評価する必要がある。

2　まとめ

新学習指導要領への移行にあたって、各都立商業高校は、特色を鮮明に打ち出すために、個性的で独自性のあるカリキュラム編成を行ってきた。これまで柔軟性に欠けると指摘されることもあったカリキュラムの内容を大幅に見直し、リーディングコマーシャルハイスクール構想をはじめ、総合ビジネス科の新設など新たな試みを始めたところである。さらに東京都では、今年度１８０校を超える都立高校において試行している生徒による授業評価を平成１６年度から全都立高校で本格実施することで、授業内容を見直すきっかけとなり、授業の改善を図ることが期待されている。

このような状況の中、「授業改善に生かす評価と指導の在り方」を研究主題として、４観点の評価を実際の授業に取り入れ、具体的な評価方法の研究を行い、さらに評価の結果を踏まえた授業改善の方法を研究した。観点別評価を導入する意義は、ペーパーテスト等による知識・理解に偏ることなく、生徒の興味や関心などから考える力、学ぶ力などを引き出すことにある。

４観点に基づく評価の研究開発は、今年度で３年目となる。昨年度の研究開発では、「ビジネス基礎」において、授業観察による評価を一定の基準で数値化して評価し、ペーパーテストだけでは計れない生徒の様々な個性を適切に評価する方法が提案された。今年度は、この提案を踏まえて「ビジネス基礎」「工業簿記」「情報処理」「課題研究」（商業技術、ＣＭ作成）の５科目の研究授業を通して、より具体的に観点別評価の方法を研究した。商業科目は多種多様であり、一元的な評価の基準を設けることは困難である。そこで科目による評価の観点の違いや評価の重点・配分の違いなどを明らかにするために、商業科目の中でも特徴的な科目を選び、各単元や各授業における観点別評価の方法を試行した。

商業教育においても多様な商業科目がある中で、それぞれの科目の特徴を生かしつつ、生徒を多面的に評価することが重要である。生徒にとって分かりやすい授業を行うためには、個々の教員の能力向上が不可欠である。今年度の研究開発が、今後の商業教育の発展に貢献できることを期待したい。